会員のひろば

雪虫の舞う頃

函館市医師会
市立函館恵山病院
水関　　清

秋の深まりとともに、日の入りの時刻は、確実に早まってくる。午後3時を過ぎて、吹き抜ける風の冷たさに気づく頃には、もう夕陽は大きく傾き、地平線に近づいている。その斜光の中に、ゆらゆらと漂う雪虫の姿を目にする季節となった。

以前住んでいた町の住宅は、海岸からゆるやかにのぼって来た坂道の上にあり、後ろには雑木林が控えていた。雑木林の中を散策してみると、ヤチダモやトドマツ、エゾマツの混合林で、タラの木も混じり、近くの住民の方々と春の恵みのおすそ分けにあずかることもある、豊かな林であった。そして雪虫の好む木々が、豊富にある林でもあった。

風の弱い秋の夕べは、雪虫の群舞に出合う宵である。夕陽の光の中を、あたり一面ゆらゆらと漂って、風に誘われて舞い上がり、時には渦状の舞を見せることもある。そっと掌の上に載せてみると、黒い肢体に薄い翅を備え、ちぎった綿のような純白のコートを両脇にまとっている。

雪虫の生活史の解明は、北海道大の河野広道氏の研究によるところが大きいとされる。雪虫の和名・トドノネオオワタムシが示すように、春先にヤチダモなどの木々の幹で孵化した幼虫は、新芽の葉裏に寄生し、葉から液を吸って成長して大型の無翅の成虫となり、単為生殖によって多数の雌の幼虫をもうける。これらの幼虫は羽化すると有翅の成虫となって、ヤチダモから飛び立ち、トドマツに至り、その幹や根に寄生し、やはり単為生殖によって数世代を重ね、秋の深まる頃、再び有翅の成虫が現われる。トドマツから飛び立ったこの有翅の成虫は、もう一度ヤチダモの木を目指す。首尾よくヤチダモの木に到達した成虫は、単為生殖によって今度は雌雄の成虫をもうけ、これら成虫は受精卵を樹皮に産みつけてその生涯を終え、翌春には再び新しい幼虫がヤチダモの木に現れるという、生活史をとるという。

この生活史の中で雪虫は、初夏にはヤチダモからトドマツへ、晩秋にはトドマツからヤチダモへ、1年に2度、それぞれ有翅成虫が空中を移動するはずである。初夏の飛翔はあまり密度が高くないため目立たないのに比べると、晩秋の移動時の密度は高く、時に群舞しつつ現われるため、つるべ落としの秋の夕陽と、初雪の季節が間近なことのイメージが重なって、この季節の思い出と強く結びつけられている。曰く、「雪虫が飛び始めると夕ご飯の時間だから、家に帰ろう」「雪虫が飛びはじめたら、ゆっくり歩こう」「雪虫が飛ぶ日は、自転車には乗らず、歩いて帰ろう。服につくと白い筋が残るから」……。

当時4歳の三男を迎えに行った幼稚園からの帰り道、雪虫の群舞に遭遇したことがある。秋の夕陽がその紅色を増す中、白い綿にくるまれたような雪虫がふわふわと、飛ぶというよりは漂うように、はかなげに舞っている。手を繋いだ三男の頭上に、私の顔の前に、懸命に翅をふるわせながら宙空の一点に留まろうとする小さな虫。

一匹の雪虫が、三男の黄色い帽子にしがみついた。

小さな頭部と触角。胸部にある6本の脚。幅広い三角形をした、透明感のある薄い2対4枚の翅の中には、葉脈のような黒い翅脈がみられる。トンボの翅に似た形をしているが、その厚みはわずかで、翅脈は翅の周縁部を走るものが多く、中央部へと伸びているものは細く、その数もわずかだ。トンボの翅脈のように、縦横には走っていない。翅の根元から尾側にかけては、ちぎった棒状の綿のようなふさふさした白いものでびっしりと覆われている。綿のコート、いやいやマントか？

帽子の上でしばしの休憩を済ませたのか、体をふるわせると帽子を離れて飛び上がった。4枚の翅を細かく上下させながら、今度はうまく宙空の一点に静止した。頭部を上にして、真横には開いた4枚の翅、そうして静止すると、綿のようなふさふさで覆われた部分は下方に来る。細かく上下する翅から生じる気流の影響で、この棒状のふさふさは下方を向いてパラシュート状にまとまり、風が吹いてくると水滴のようなかたちにふくらむ。風が弱まると、またふさふさはスカートのように下を向く。そんなふうにして、漂う。

この姿で飛んでいるから、「雪虫」なんだ。遠目には雪のように見える。そして、雪虫がふわふわ飛ぶのに、このふさふさは重要な役割を果たしているようだ。トンボのようにしっかりとした翅を持たず飛翔力も弱い雪虫は、飛び上がったり休んだりを繰り返しながら、そして時々の風の力を借りながらふわふわと漂い、トドマツからヤチダモへの引越しを敢行するのだろう。

ここまで一緒に歩いてきた、幼稚園のお友だちの一人が、ぴょんぴょん飛び跳ねはじめた。頭上に飛ぶ雪虫をつかまえたいのだ。

「ねえ。雪虫をつかまえるのもいいけれど、もっといいことがあるよ」

「え！どんなこと？」

「このまま、坂道の先の林に行こうよ。そこで、ぴょんぴょんしようよ」

「えー。どーして？」

「林の中には、雪虫の好きな木が

生えているんだ。雪虫がこうして飛んでいるのは、その木のところまで行きたいからなんだ。林のところまで歩いていけば、今みんなの服についている雪虫も林の中の好きな木のそばまで行けるよね。そこでぴょんぴょんすれば、雪虫はびっくりして飛び上がるだろう。そうすれば、好きな木をすぐに見つけられるじゃないか」

秋の深まりから雪の季節までは、とても短いのだから。

倭寇（ワコウ）（海賊集団）について

小樽市医師会
野口病院
本間　　勉

1. はじめに

14～16世紀に東シナ海を中心に朝鮮半島や中国沿岸を荒らし回った「倭寇」と呼ばれる海賊集団が海上だけでなく上陸もして略奪・拉致・残虐を働いていたというが、一体何者だったのだろうか。

2. 倭寇の発生（前期倭寇）

1336（建武3）年、後醍醐天皇の南北朝時代に倭寇と恐れられた海賊集団が、500隻の大船団で朝鮮半島に上陸して、食料や拉致を敢行したのに始まる。拉致被害者は数万人という。

侵略最大の高麗の兵馬使（軍事長官）李成桂が倭寇討伐に功績を挙げ、李氏が朝鮮（1419年）のクーデターに成功するや、本格的倭寇征伐として対馬に大軍を派遣して制圧した。この14～15世紀を「前期倭寇」という。

3. 倭寇復活（後期倭寇）

“応仁の乱”が1467年に勃発後、倭寇が復活して中国浙江省沿岸を荒らし回った。明の嘉靖年間（1522～1566年）の海賊行動は540回に及び、1588（天正16）年に豊臣秀吉が“海賊禁止令”を発するまで続いたという。

4. 倭寇の起源

- 肥前（佐賀県・長崎県）の松浦地方を本拠地とする嵯峨源氏の末流である「松浦党」は、平安時代より水軍を組織して平氏方の主力水軍として源平合戦で戦った一族であるが、対馬・壱岐・五島列島まで勢力を伸ばし、水軍を主力として海賊行動をとることになった。
- 鎌倉初期の1226年、藤原定家の“明月記”には、松浦党の一団が数十の船で高麗に上陸し略奪を行ったとあるし、吾妻鏡は1232年に肥前の一団が高麗に渡り多くの珍宝を盗み取ったと記述している。

  倭寇の本拠地が壱岐・対馬・松浦であることから「三島倭寇」と呼んでいる。
- 倭寇という言葉は、高句麗広開土王碑の銘文中にある404年の記事が初めであるという。
- 高麗史には1350年“倭寇の侵ここに始まる”とあるので、この時から“松浦党”が倭寇として侵略を開始したとも考えられるが、朝鮮の史書（東史綱目）には“高麗人への報復”とある。実は1274年（文永の役）、1281年（弘安の役）の2度の元寇で元（モンゴル）と高句麗の合併軍が、松浦党の本拠（壱岐・対馬・五島列島）に甚大な被害を与えたことへの復讐が目的であったという。

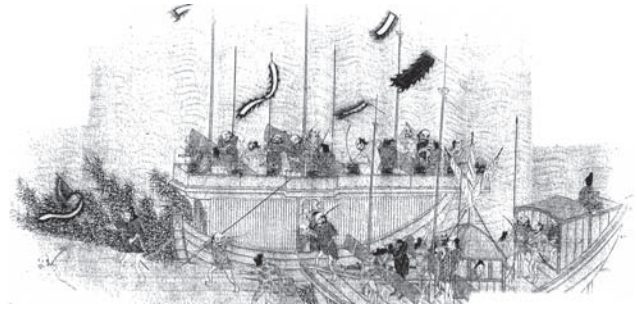
  蒙古・高句麗を“むくり・こくり”といって憎悪・恐怖を抱いたのは、元寇の時に対馬・壱岐の住民が男は殺害され、女は手のヒラ（手）に穴を開けて数珠（ジュズ）繋（ツナ）ぎにされ舷側（ゲンソク）に縛（シバ）りつけたという残虐行為を受けているからである。
- 次第に倭寇は増大強力となった。1380年には高麗首都を大軍で襲い交戦するようになり、米穀を強奪するばかりでなく、拉致した高麗人を農作業に当たらせたり、他の労働力を補完させている。
- さらに高麗の忠宣王や元皇帝フビライの肖像画を持ち去ってもいるし、人身売買も横行した。
- しかし、この頃になると倭寇のメンバーは倭人が1割くらいに減少して、高麗人や中国人が大多数となっている。

5. 倭寇討伐作戦

- 李成桂（高麗軍事長官）は、半島各地で次々に倭寇を撃破し、1380年荒山で500隻の大船団が上陸、倭寇の大軍に壊滅的打撃を与え、活動の沈静化に功を奏している。
- 1393年、朝鮮国王・李氏と室町幕府3代将軍・足利義満が倭寇の取り締まりを強化して、1404年に日朝貿易を再開したのである。
- 1418年、再び倭寇が活動化したが、朝鮮太祖（李氏）が翌年6月に1万7千人の追討軍で対馬を急襲、倭寇船やその住居地を焼き払った。この「応永の外寇」で一度途絶えたが、1443年「嘉吉条約」で復活している。

6. 進奉船

- 13世紀半以降は日本の「進奉船」（特別の日朝間交易定期船）が通交していたが、モンゴルの侵攻を恐れて廃絶した。このため、交易で生計を立てていた日朝両国沿岸部の漁師は密貿易をするようになり、松浦党中心の倭寇と一体化したため強大化している。
- さらに14世紀中頃には、朝鮮半島で蔑視されていた非定住民



明代末（17世紀）に描かれたとされる『倭寇図巻』の倭寇の上陸。明代の画家・仇英（きゅうえい）作と伝えられたが、現在では作風の相違などからほぼ否定されている（東京大学資料編纂所所蔵）。

（エッタ）も倭寇と合体して海賊行為に走った。

7. 非定住民（被差別民）

朝鮮半島で、牛馬の屠畜や皮革の加工者「禾尺（カシャク）」と仮面芝居や軽業（雑作業）の「才人（サイジン）」といわれて伝統的に差別・弾圧を受けていた集団があった。今でも日本の大阪周辺に「エッタ」といわれている人々が現存している。

8. 「寧波（ネイハ）の乱」

・1523（大永3）年、明の太祖・洪武帝は、人民の海外出航を禁ずる“海禁策”をとっていたが、「冊封国」（明の臣下国）の朝貢貿易は継続されていた。

・“応仁の乱”後、近畿・四国の守護大名・細川氏と中国・九州大名・大内氏の“遣明船”の寧波港入港順争いの乱を契機として倭寇が復活したという。これが「後期倭寇」とされている。

明への朝貢に使われた遣明船の復元モデル（船の科学館蔵）。1404年から1574年までの間に、17回、のべ84隻の遣明船が中国皇帝に朝貢した。

9. 倭寇の真の主体

前期・後期倭寇の大多数は日本人ではなかったという。明代正史は“倭人は10分の1～10分の3である”と記述している。主体は中国沿岸部の私的貿易業者であり、“倭寇王”は中国の“王直”であったという。

10. 倭寇王「王直」

・中国安徽省の貧農出身、出世を夢見て海賊団に入り、頭角を現して“頭領”になり、東シナ海一帯で密貿易を活発に行う。後に日本人・ポルトガル人や南洋人も入団した。松浦党と連携して“海上には二賊なし”といわれるようになる。

・王直が明政府の攻撃で日本の五島列島に逃れて“五峰”と名乗り、平戸に住居を構えた1530年頃は、唐・南蛮の珍品が山と積まれ、堺商人が多数日参して“西の都”と言われたという。彼主体の倭寇（武装集団）は数百隻に及び、沿岸の海を覆いつくしたらしい。この大倭寇に歯の立たない明政府は、彼が投降すれば自由貿易と親子や部下の本国生活を許可すると説得した（1557年）。彼は倭寇停止と投降を誓ったが、2年後に処刑された。

屋敷を構えていた長崎県平戸市に立つ王直像。上海の巨頭として、東シナ海全域を荒らしまわった。

11. 日本人倭寇の悪名

・中国史書に倭寇の日本人は数少なかったと明記されているにもかかわらず、倭寇が日本人の残虐さを示す代名詞になっている理由は、倭寇の構成員が頭頂を剃り上げ、和服を着て日本刀等を使用し倭人を装っていたからである。前述したように、倭寇の日本人は10分の1～10分の3に過ぎなかったのである。

・明朝は反抗・残虐・失態等をすべて日本人の倭寇に向けて、自らの失敗・政治貧困を粉飾していたのである。中国では秀吉の朝鮮出兵を「万国倭寇」といい、日中戦争を「20世紀倭寇」と呼んでいる。

12. 薩摩産“ヤジロウ倭寇”

鹿児島生まれの出自不明の漁師ヤジロウは、故郷で殺人を犯して東南アジアに逃亡（密航）し、ポルトガル船でマラッカに到着。この時〝フランシスコ・ザビエル〟と出会い（1547年・天文16年）、日本の国のこと、キリスト教のこと等、熱心に語り合った。ザビエルはヤジロウの知的好奇心に興味を持って、ヤジロウをゴアの聖パウロ学院に入学させて“パウロ・ダ・サンタフェ”の洗礼名をもらってクリスチャンになった。

・1549年、ヤジロウの人間性に惹かれて日本での布教を決意して薩摩に来たザビエルは、ヤジロウの口添えで領主・島津貴久の許可を得て布教に成功した。さらに松浦隆信領主の庇護のもと布教してマラッカに戻った。ヤジロウはその後、海賊船ジャンク船で中国に渡り倭寇に加入したが、何者かに殺されたという。

13. むすび

・倭寇とは“日本の侵略”を意味するが、時代と地域と構成員によって内容は多様となった。

・活動が活発化・拡大化したのは1350～1580年の200年余におよぶ。

・発生当初は元寇に対する復讐であったが、次第に明政府の貿易廃絶による密貿易が主体になり、略奪・強奪・拉致等の海賊的行為に及ぶようになった（日本人は倭寇の10分の1～10分の3であったのに）。

・密貿易の利益効果

・中国産唐糸（絹糸生糸）は日本で20倍
・薬品は上流階級の必需品
} 輸入品

・鋼（備前・備中）は中国で4～5倍
・日本刀は年間中国で3万7千振
} 輸出品

○明銭は何よりも貴重であった。

○1575年からポルトガル人が倭寇に参加して（中国・朝鮮・日本・マレー・ポルトガル等の各国人の参加）、国際的密貿易が横行したのである。

開院10周年と父

上川郡中央医師会
ひじり野小池クリニック
小池　台介

父は今年で満86歳になる。5年前に一過性脳虚血発作を起こした。降圧剤は内服しているが、麻痺もなく、すこぶる元気だ。夏に愛知県から北海道へやってきては親子ゴルフをすることが5年前から毎年の目標のひとつとなった。キャディさんから「若いですね」と褒められれば得意げになって、電動カートにも乗らず、フェアウエーを闊歩する。「次のホールまで距離がありますから、ここはカートに乗ってくださいね」と優しく言われれば「はい」と言って素直に乗る。可笑しいほど子供っぽい。

父は商社に永く勤めていた。戦後間もない頃、新しい事業を興すために上司の命令で台湾へ派遣された。日本の植民地支配下だった台湾は、敗戦後に大陸の中華民国に返還された。役人のほとんどが大陸出身者で、日本人に対して強い反感があり、嫌というほど差別といやがらせを受けたそうだ。父は仕事に飢えていた現地の青年を雇い、台湾の人と一緒になって仕事をした。

それでも、目新しい仕事もなく苦労の続いていたある日、海岸に行くと、新鮮な海の幸をいっぱい積んだ漁船が入港していた。しかし、その新鮮な魚介類のほとんどが捨てられてしまうことを不思議に思った父は理由を聞いてみると、獲れたものを冷蔵保存する施設が漁港にないことが原因だった。これは商売になると思った父は、漁業関係者に冷蔵倉庫の施設を建設することを勧めた。これがきっかけとなり、冷蔵室プラントの需要は急速に広がり、各漁港に建設されることになった。以後、会社の業績は順調に伸び、仕事が面白くて仕方がなかったと楽しそうに自慢げに話してくれた。

2年前、父と台湾へ行った。これが最後になるかもしれないから一緒に行きたいと頼まれた。父は定年まで2度にわたり台湾支社に駐在し、合計20年近く、台北で過ごした。私も35年ぶりに訪れた台湾だった。緊張しながら台北の空港に着くと、そこで出迎えてくれたのは50年以上前に父と一緒に仕事をした同僚の方たちだった。父が自ら面接をして採用した方ばかりだ。皆さん今は悠々自適の暮らしをしていて、口々に父に感謝していた。遠慮がちに答えている父はとても満足そうだった。評判のレストランで北京ダックをたらふくごちそうになりながら、生真面目で頑張り屋の父の若い頃の様子を思い浮かべてみた。

◇

東神楽町で開業して今年10月で10年になった。一言でいえば、あわただしい10年だった。しかし、そんな感慨にふけっているひまもなく、インフルエンザの患者さんで疲れ果てている時、突然父からメールが届いた。

> 開院10周年、おめでとう。
> 10年前を思い出し感無量となります。雪に覆われた敷地を見せてもらった時、人口8000人そこそこの小さな町の一角の、周辺のまばらな住宅を眺め、果たしてこのようなところで経営が成り立つのか、不安が正直ありました。が、開院に賛同しました。君たち夫婦の強固な決意と周到な調査を信じたからです。その時、僕は自分が台湾駐在を決意したことを思い出しました。会社が意図する未開の海外市場の開拓を社員の誰一人名乗り出るものはいませんでした。僕は人生には一大決心する時がある。その決意をしなかったらおそらく平凡なサラリーマンで終わり後悔したと思います。その決意を支えてくれたのは両親と博子でした。
> この10年君たちには幾多の人知れぬご苦労があったと思います。よくぞ乗り越え立派に成功しました。心から敬意を表します。
> そして僕と博子を幸せにしてくれました。ありがとう。
> 真二　　博子
> （注：真二（父）、博子（母））

何度も読み返した。このメールは開院10周年の最高の贈り物になった。

北海道医報ファイルについて

北海道医報本誌を1年分綴ることができるファイルを用意しております。

ご希望の方に無償にてお送りいたしますので、下記まで送付先ならびに希望数をご連絡ください。

記

申込先：北海道医師会事業第一課
〒060-8627　札幌市中央区大通西6丁目
TEL 011-231-7661　FAX 011-252-3233
E-mail　ihou@m.doui.jp